

大磯の虎をめぐる十郎祐成の描かれ方

『曾我物語』諸本間に見られる相違

小井土 守敏

一 はじめに

本誌前号において、『曾我物語』諸本間における幼年期の十郎五郎二人の描かれ方の相違を検討した。即ち荒木良雄氏の四系統の分類²に従い、

真名本系

真名十巻本

仮名交じり略本

仮名本系

十巻仮名本

十二巻仮名本

妙本寺本

大石寺本

太山寺本

十行古活字本

略号【妙】

【石】

【山】

【十】

の四本をテキスト³として、真名本系諸本から仮名本系諸本へ至る間に行われた改作の方向を考察したのである。

諸本の成立の過程については、荒木氏は「曾我物語三遷の論」⁴において、まず真名本が成立し、次いで仮名本が成立したとされるが、氏の説に疑問を投げかけられる先学もあり、村上学氏は、その緻密な本文調査から、現存仮名本が現存真名本のような唱遣文を殆ど有していない点、及び両本の間にも単なる書写上の原因で生じたのではない異同が認められる点から、現存真名本の底本と極めて接近した、仮名本の底本（原初本）を想定され、現存真名本との二段階の成立を考えるべきであるとされている。⁵

真名本仮名本それぞれが祖としたと考えられる原初本の存在の有無にかかわらず、原初本からの書写を重ねていく過程において、諸本はそれぞれの本文を成長させていったのであるとすれば、その諸本には、やはり享受者を意識した作り手側の意図があったはずである。つまり、享受者が曾我兄弟や『曾我物語』自体に要求した何かに対して応えていったはずである。そしてその意図は、物語の中に描かれる兄弟の相違として表れている。諸本間の記事の相違から、それぞれの諸本を書き継いだ人々の意図、享受した人々の要求したものを見いだせるはずである。

そこで本稿では、大磯の遊女虎をめぐる十郎五郎兄弟の描かれ方について、前掲の四本を比較し、特に虎に対する兄十郎の対応や態度の描かれ方の諸本間の相違を考察する。

加えて、【山】【十】にのみ描かれる、兄弟を巡る数人の女性についても検討し、それらのエピソードの生じた背景についても考察することにする。

二 大磯の遊女虎との出会い

大磯の虎とは、【妙】によると、

抑、申^レ彼虎^ニ遊君[、]母自^レ本平塚宿者。尋^ニ其父^一、平治乱時被^レ誅悪右衛門督信頼卿舎兄、民部権少輔基成被^レ流^ニ奥州平泉^一人御乳母子、云^ニ宮内判官家長^一人娘。其故、此人依^ニ平治逆乱謀叛^一有^ニ兼都内^一、落^ニ下東国鎌倉方^一、相模国住人云^ニ海老名源八権守季貞^一人、都有^ニ芳心事^一間、憑^ニ其宿所^一居程、成^ニ三年来^一、平塚宿云^ニ夜叉王^一通^ニ傾城許^一程、儲^ニ女子一人^一。寅年寅日寅時生、其名呼^ニ三虎御前^一。是賞邊程、此子申^ニ三五

歳一年、宮内判官家長空成。父死後、副母宿中遊、付形吉、大磯宿長者云三菊鶴一傾城乞取、遵我娘一。

(【妙】巻第五 訓点は稿者)

と説明される遊女であり、兄十郎の恋人である。この女性との恋愛は兄弟の目標である敵討ちと両立するはずもなく、『曾我物語』が単なる敵討ちの物語ではなく、十郎と虎の悲恋の物語としても享受されるために、大磯の虎は、重要な役割を担う人物である。また、兄弟討ち死にの後も、兄弟の供養のため、諸国を修行して回った女性であり、『曾我物語』成立に深く関与した修験比丘尼たちの姿を代表する者⁵⁾という見方をされる登場人物である。

兄十郎と、この遊女虎との出会いの契機は、母の叱責にある。兄弟は異父兄弟である京の小次郎に敵討ちの助力を依頼するが、断られる。小次郎からその件を聞いた兄弟の母は、兄十郎を呼び出し、戒める。母の希望に添わず、元服し、勘当を蒙った弟五郎は、母の前に出ることができず、物越しに母の諫めを聞く。

母に、敵討ちは諦めたと思わせるために、十郎が女性のもとへ通うという事を提案するのが、【妙】【石】【十】では弟五郎であるが、【山】のみは十郎になっている。【山】【十】では、ほぼ同じ内容の問答であるのに、発話の担当者が異なるのである。この問答を吟味してみたい。【山】の記事を見ると、

五郎もおなじくたちて十郎がかたにかへり、あにをまちうけて、
(五郎)「されバこそ申つれ。小次郎うしなふべかりし物をたすけをきて、大事をもらされぬこそやすからぬ。弓矢とる身ハ、大事せうじ心にかゝらむ事をバこらへず。一さうにすべき

事なるをや。いまハ叶まし。我らがしたりとこそおぼさんずれ。」
とて、物をも申さでいたりけり。しばらくありて十郎申けるは、
(十郎)「さても此事をおもひとゞまるべきやうにさいしをもてと仰候つるこそミ、のそこにとゞまりてあわれにハ候へ。さむき物ハしやきよくをもむさぼらずて、しかもだんうむをおもひ、うへたるものハせんきんをかへりミず。つれひをかんに思ひのあれバ所領しよたいものぞみなし。たゞおもふ事こそいそがわしけれ。※げにやおとこの心のとゞまる物ハ、さいしにすぎすと申けり。我らうち死のゝちのこりとゞまるねうばう、山野にまよハんもふびんなり。またなんによの子の一人もいできなば、我らがやうにまとい物として物をおもハんもむざんなり。時宗はもとより法師になれる身ぞとおもひていく程へざる世中の、まつたくさだめたるめこハもつべからず。きミしらひやうしの事ハおとこのひが事の、ねうばうにハよもあらじ。てごしきせがわのほとりにて、さるべきゆふくんあらバ、あひなれ給べし。しかもみちのほとり、かたきをねらハんたよりもしかるべし。」と申けれバ、五郎きゝて、(五郎)「うけたまはり候ごとく、こんじやうのしうしん、ごしやうのためもしかるべからず。一日もいのちあらんかぎりハ、心やすくねんぶつ申さむ。我らがいのちハあれバあるが、たゞいまもびんぎよくバ、うち捨べし。あミだ仏。」とぞ申るたる。

(濁点、句読点等は稿者 以下同)

とある。兄の発話と判断される部分の、「時宗はもとより法師になれる身ぞとおもひていく程へざる世中の、まつたくさだめたるめこハもつべからず」という表現(傍線部)に疑問が残る。十郎が弟に

対して「時宗」と呼ぶ例は他に見られない上、「めこハもつべからず」（傍線部）は、明らかに十郎の発言とは解せない。「キミ（略）あひなれ給べし」が十郎の発言であるとすれば、遊女の元へ通うのは五郎ということになる。この発話者と発話内容の混乱から、「うけたまはり候ごとく」の発話者が五郎ということになつてしまつたのである。虎のもとへ通うのは、兄十郎であり、従つてこの提案をするのは弟五郎でなければならぬ。「山」では、※印の、他人の意見や態度を肯定するときの納得した気持ちを表す「げにや」の部分から、発話者の交代が行われなければならなかつたはずである。憶測を重ねると、※印の直前にあつた「五郎きゝて」を写すの段階で落としてしまつたのではなからうか。

同じ部分を、【十】では、

五郎も足ぬきしてたちけるが、十郎に申けるは、（五郎）「さればこそ申つれ、小次郎をうしなふべかりつるものを、たすけおきて、かゝる大事をもらされぬる事こそ、やすからぬ。心にかゝらん事をば、ためらい候はず、逸早にすへべき物を。あはれみ胸をやくとは、かゝる事をや申べき。今はかなはじ。われらが所為とおぼさめ」とて、息つきぬたる。（五郎）「さて、此事思ひとゞまるべきやうに、妻子もちて、安堵せよとおほせられつるこそ、耳にとゞまりて、あわれにこそ候へ。さむき者は尺玉をもむさぼらで、たんかをおもひ、うへたる者は、千金をもかへりみずして、一食を美す。身に思ひのあれば、かへりみずして、所領所帯も、のぞみなし。たゞ思ふ事こそ、いそがはしく存ずれ。男の心とゞまるものは、妻子にすぎずといへども、はれら討死の後、のこりとゞまりて、山野にまじはらんも

不便なり。又、男女のならひ、わかき子一人もいできたれば、われ法師になるべき身なれ共、このためにかやうになりぬれば、さだめたる妻もつべからず。あそびなどは、夫のひが事かゝるまではあらじ。されば、手越・黄瀬川のほとりにて、さりぬべき遊君あらば、あひなれてかよひ給へ。しかも、道のほとりなり。敵をうかがふべきたよりも、しかるべし」と申ければ、（十郎）「執心、後生のため、しかるべからず。一日も命あらんかぎり、心しづかに念仏申て、後生をねがふべし。はれらが命、今あればあるが、たゞ今も便宜よくは、うちいでなん。阿彌陀佛」と申て、すぐゆきける心のうちこそ、無慙なれ。

（【十】）

とされている。話者を明記してはいないものの、話者と発話内容に矛盾は見られないのである。【山】で起こつた発話者の混乱を、【十】では整理しているといえる。

さて、論をもとへもどすと、いずれにしても、敵討ちという兄弟の目標を表面上隠すために、特定の女性と交際するということは、四本で共通である。そして、その条件は、父の仇を討つた後、夫の罪が及ぶことのない、遊女であるという点も共通している。

それよりも、ここで注目したいのは、五郎の提案に対する兄十郎の対応の諸本間の相違である。【妙】【石】では、

十郎有_レ佐尋_二宿々_一。建久二年自_二十一月月上旬比_一、曾我十郎助成被_レ諫_三弟五郎時宗_一、自_二小田原宿_一始、至_二佐河古宇津波美宿_一、小磯大磯平塚宿、三浦鎌倉_二尋_三所々_一、與_レ心无_二女人_一、流轉生死古里、廻合習_レ不_レ違_二乃往退去契_一、有_二隨縁真如甲斐_一、大磯宿云_レ虎遊女、成_二二十七歳_一、十郎申_二貳拾_一込_レ契通。

とする。これに対して【十】には、

(【妙】)。【石】もほぼ同)

「執心、後生のため、しかるべからず。一日も命あらんかぎり
は、心しづかに念仏申て、後生をねがふべし。はれらが命、今
あればあるが、たゞ今も便宜よくは、うちいでなん。阿彌陀佛」

(【十】)

とある。五郎の提案に素直に従い、十郎は小田原から鎌倉まで「心
に與う」遊女を捜し歩いたとする【妙】【石】に対し、【十】は、
十郎は弟の提案を拒否するのである。この世に思いを残すことが不
都合であるということよりも、自分達の命は、敵討ちのためにある
という考えからである。【十】では、十郎の敵討ちを最優先させる
姿勢が強く描かれているのである。【山】においても、前述のよう
に、発話者の混乱を想定すると、十郎が敵討ちを優先させる姿勢が
描かれていると考えられる。

こうした描かれ方に呼応して、【十】【山】には兄弟が宿所を尋
ね歩いたという記述はなく、ただ語り手に、
されば、しうれんのせいにつきずして、

(【十】)。【山】ほぼ同)

と語らせているのみである。

この十郎と虎との出会いの場面の相違は、十郎の心中に占める
「敵討ち」への執念と、「敵討ち」へ向けて他の一切に心を砕かな
い姿勢から発生している。次節で虎と十郎の関係について考察する
が、そこにおいても、【山】【十】では、十郎のこの姿勢は貫かれ
ており、巻第六の虎との別れの場面の表現にまで至っている。

三 虎と十郎の関係

【妙】【石】において、虎と出会った後の十郎について、以下の
ような記事が見られる。

虎十七歳自三十郎武拾年一通初、年三年間断金契不_レ浅。訪_二唐
国旧跡_一、玄宗皇帝與_二楊貴妃_一七夕彦星相見暮、在天願成_二
比翼鳥_一、在地願為_二連理枝_一契古不_レ劣_二夫婦_一通行。付_レ之、
十郎家思_二取置_一、第五郎无_レ由事煩_二諫問_一、只憑_二思許_一通_二大磯宿_一
。時宗亦_二一日片時不_レ離_二十郎_一、副_レ身如_レ影_二二人_一烈通。而程
敵漸成_二大名_一。付_レ之_二二人者共歎_二深成_一。

(【妙】)。【石】もほぼ同)

「敵討ち」という第一の目標があればこそ、十郎は正式な妻をも
持たず、子もつくるまいとし、また、「敵討ち」を諦めたと周囲に
思わせようと、遊女のもとへ通い始めたのである。ところが、この
記事によると、二人の中の睦まじさを玄宗皇帝と楊貴妃にたとえて
述べた後、十郎が、恋人虎を妻として家に迎えようとしている。こ
れは五郎の諫めによって思いとどまるのだが、【妙】【石】では、
十郎は男女の道に迷い、「敵討ち」という初志すら揺らいでしま
う。いわば「弱い兄」であることが伺える描かれ方である。まさに、
「男女留_レ心者、伝_二承系_一惜縁夫婦_一」(【妙】)。【石】ほぼ同)
という五郎のことは通りになってしまふ「弱い兄」十郎であるため、
それを諫める「強い弟」五郎が描かれているのである。加えて、こ
こにおいても、弟の諫めに素直に従う兄十郎の姿が示されている。
これに対して、【山】【十】には、この「家思_二取置_一」に該当
する記事がない。十郎は虎のもとへ「思ひをこめて」通うのである
が、虎のもとへ通うことの根本的な意味、「敵討ち」を諦めたと周

困に思わせる、ということ忘れていないのである。つまり、この記事を削除することによって、虎との恋愛によっても揺るぐことのない、「敵討ち」を最優先する「強い兄」十郎が描き出されることになる。「強い兄」十郎は迷いもない。すなわち、兄の迷いを正す「強い弟」五郎を描く必要もなくなるのである。

【妙】【石】に比較して、【山】【十】では十郎は、虎との交遊を「敵討ち」のためのものであると割り切っているといえる。このことは、出会いの場面と共通する。【山】【十】では、十郎は「敵討ち」への強い意志によって、遊女のもとへ通うことにした理由を忘れることなく、そして「たゞ今も便宜よくは、うちいでなん」とするのである。

【山】【十】では、大磯へ通う兄弟を五郎も、影のごとく、寸もはなれずして、もろともにとおりけり。これもたゞ、敵の便宜をねらはんためと見えし。あわれなる有様、心ざしの程、無慙といふもあまりあり。

(【十】)。【山】もほぼ同)と描き、語り手は、常に「敵討ち」のことを最優先する兄弟を評価している。

とはいっても、十郎と虎の関係が【妙】【石】に比較して【山】【十】が浅かったとは決して言えない。虎と十郎を描く場面は、

【山】【十】の方が多いいってもよいくらいである。例えば、虎のもとへ久しく訪れなかった十郎を、虎が責める場面(巻四)が【山】【十】に設けられている。

また、大磯を訪れた十郎は、虎と他の遊女達との話を立ち聞く。虎は、宿場を通過して行く大名達の馬や鞍が欲しいという。その理

由を他の遊女に問われた虎は、「十郎殿に差し上げるためである」と答える。十郎はここで虎の事を「これほどなきけふかきもの」(【山】)と感ずるのである。そして、「いつよりもむつまじげに、あかぬちぎり」(同)を交わす(巻六【十】もほぼ同)といった場面も【山】【十】には設けられている。

また、和田義盛との盃論をくりひろげる場面においては、【妙】【石】では、義盛が大磯宿で有名な遊女である虎を見たいと座敷に招き、ちようと虎のもとへ来ていた居合わせた十郎・五郎も招き、席を設ける。義盛は、虎を見ると、「有_二吉_一傾城、義盛年不_レ寄、不_レ慙_二十郎_一、可_レ移_二心_一」(【妙】巻五。【石】ほぼ同)と、虎

の美貌を讚える感想を洩らす。この場面を【山】【十】では、次のように変化させている。大磯宿で酒宴を催していた義盛が、その美貌で有名な遊女、虎を席に招くが、十郎と共にいた虎は義盛の席に出ようとしない。再三の催促の後、やっと席に出た虎であったが、義盛はすっかり機嫌が悪い。十郎も共に呼び出し、虎に自分と十郎いずれかに「思ひ差し」を強要する。虎は年輩の義盛を差し置いて、十郎に「思ひ差し」し、その席が一時緊張する(巻六【山】【十】)。これらの【山】【十】に見られる記述は、虎が十郎をいかに深く思っていたかを物語るものである。

虎と十郎の関係は、四本を通じて浅からぬものであるが、【妙】【石】では、虎と十郎、互いの深い想いによって結びついているといつてよく、【山】【十】では、虎の十郎に対する想いの方が深いという描かれ方をしているのである。このことは、【山】【十】では、何ものにも揺るがすことのできない「敵討ち」への強い執念を持つ十郎を描くためであり、この十郎の姿勢は、虎のもとへ通うよ

うに五郎が勧めたときの十郎の姿勢に呼応している。また【妙】
【石】では十郎が「家思取置」と迷いを生じたことで二人の関
係の深さを表現したのに対し、【山】【十】では、十郎の迷いが無
い分、虎の十郎へ積極的姿勢を描くことよってそれを表現してい
るのである。

四 虎との別れ

頼朝の一行が富士野の巻狩りを開催することを知った兄弟は、そ
の狩りに同行し、父の敵を討ち果たそうと決意する。十郎は、虎に
兄弟の宿願を語り、山彦山で虎と別れを惜しむ。(巻第六)。この
場面に至っても、十郎は、【山】【十】に比較すると、【妙】【石】
のほうが依然迷いの残る「弱い兄」のまま描かれている。

山彦山の峠で、

今少しもをくりたくは候へ共、かならず今朝よりいでんとさだ
めしかば、さだめて五郎もきたらん。名残はつくべきにあらず、

(【十】。四本共ほぼ同)

と、四本共に十郎がほぼ同じ内容の別れの言葉を述べ、一旦は互い
に別れるのではあるが、再度虎に呼び戻されている。

【山】【十】においては、呼び戻された十郎が虎に掛けた言葉は、
「何事ぞ」(【十】【山】)である。これに続いて、

や、ありて、とら、いきのしたに申けるハ、「さぞとたのまぬ
夕暮も、こまのあしなミ、くつわのをとのする時は、もしもや
来り給ひぬらんと、心をつくすおりく、に、その人となく過行
バ、むなしき床にふし、鳥の音にあくるおもひをさへられ、ゆ
ふべのかねのこゑに、くるゝたよりをまちし事もはかなかりけ

るちぎりかな。三とせの夢の程もなく、さむる別になりぬるぞ
や。たゞかりそめ二おもふだに、わかれとなればかなしきに、
たゞいまはなれまいらせなバ、しやうぐ、せゝをふるとも見た
てまつる事あるまじ。たゞ身づからをも、この世になき身とな
して一つみちにぐし給へ」ともたへこがれ給へば、助成いひけ
るは、「たがいの名残を申さバ、年月をくるともつきがたし。
たゞ先世のちぎりのほどこそうらめしく候へ。こよくのむじや
うハ春の花、この世ハかりのやどりなり。わぎうのつゝ上に
なに事をかあらそひ、せきくわのひかりのうらに、この身をよ
するならいなり。なげくとも叶べからず。会者定離とて、あふ
物ハかならず一たびわかるゝためしあり。すけなりとにもかく
にもまかりなり候ハゞ、御なげきをとゞめられ候べし。後生菩
提をとぶらいて給ハリ候へ。あまりにときうつり候へバ、だう
三郎が心もはづかしく候」とて、おもひきりてぞ別ける。

(【山】)

と語る。【十】では、十郎のことばの途中に釈迦と業師の別れを記
す「比叡山のはじまりの事」という章段を挿入しているが、虎と十
郎のやりとりについては、【十】もほぼ【山】に同じである。

虎との別れに際し、【山】【十】では、十郎は終始冷静で別れを
いたしかたないものとしてとらえているように描かれている。この、
少々冷淡に過ぎる十郎を、虎が「なをもたうげにこまをひかへて、
うしろすがたのかくるゝ程ハ見をくりける。」(【山】)のである。

これに対して、【妙】【石】における二人の別れの場面は、

是時移悲、左可レ有不レ事、不レ及レ力別耶、引三分彼方此方。

互後返見、俱溺レ涙、山隔レ中幽隠三面影、可レ然乍レ知、常被

見其方山。足短山峻方懸、何同心、

【妙】。【石】もほほ同

と描かれている。十郎は、何度も後ろを振り返り、涙に濡れ、虎の姿が見えなくなつてからも、山の彼方を振り返り、虎のことを恋しく思う。【妙】【石】では、十郎は虎への思いを断ち切り難く描かれているのである。

また、別れの後の十郎は、

十郎返三宿所、不_レ被_レ忘_二虎後_一寐、

【妙】。【石】もほほ同

と、さらに思いを断つ事のできない「弱い兄」として描かれ、涙に暮れている兄を案じた五郎に、「此者(虎)惜_レ別候程」(【妙】)と応えている。

一方、【山】【十】では、十郎は虎と別れ宿所へ帰るとすぐに、五郎と共に富士野巻狩りへの準備を始める。虎の面影をしのぶ類の記事は一切見られない。その部分は、

五郎、待遠なる折節、十郎来りて、「此者送しとて、今まで時をうつしぬ。いかに不思議に思ひ給ひけん」と申ければ、「何かは苦敷候べき。昔もさる事の候。(中略)ましてや、人間として、いかで恋愛思はざるべき。」十郎聞て、「大にたがふ心かな。う天王は、利益方便の恋也。薄地凡夫、輪廻の執着也。

一にあらじ」と笑て、各富士野の立出をぞ急ける。(【十】)と、虎との別れを終えてきたばかりの十郎に、「笑(ひ)て」五郎に應對させているのである。特に【十】では、他の三本には見られない「嵯峨の釈迦つくりたてまつること」という章段を中略した部分に設けていることを添えておく。

【妙】【石】における十郎は、富士裾野への道中にも、

十郎高禮寺山守三松原、被_レ思_二出大礮虎事_一耶、

足引ノ山打コエテ明日ヨリハ母ソノモミチイモヤナケカン

【妙】)

と、虎に想いを馳せている十郎が描かれるのである。一方【山】【十】では、兄弟が目指す狩場への道中に、五郎が、父を虎に喰われた子が父の敵の虎を射てみると岩に放った矢が突き刺さっていたという敵討ちへの執念の深さの話をする。その話から五郎は戯れて以下のような歌を詠み、それに対して十郎は、戯れて返すように描かれている。

とらと見てある矢も石にたつ物を

など我が恋のとをらざるべき

十郎きいて、「や、との。歌ハさもこそあるらめ。いまハ助成にあふての物がたりなれば、など我かたきうたであるべきとかなれかし。」「げにやおりによる物がたり、あやしく申て候なり。・・・」(【山】。【十】もほほ同)

【山】【十】に描かれる兄十郎は、大磯の虎への想いを断ち切っている。涙に暮れながら富士野を目指す、【妙】【石】に描かれる十郎とは対照的である。【山】【十】における十郎の描き方は、虎との別れに悲しみは抱きながらも、あくまで「心猛き」兄であり、虎への未練を享受者に感じさせない。前節に述べたように、ここでも【山】【十】において、兄は、「敵討ち」に関して何ら譲ることのない「強い兄」となっているのである。

五 兄弟をめぐるその他の女性

【妙】【石】と比較すると、【山】【十】に描かれる兄弟には、二人をとりまく女性がより多く登場する。彼女達はすべて、【妙】【石】の二本には登場しない。彼女たちにもつわる話は、兄弟の敵討ちという『曾我物語』の本筋には深く関わりを持たない。いわば挿話という扱いと言ってよいのであるが、どのような挿話が【山】【十】において付加されているかを、ここで述べておきたい。

第五郎は、母の懇願により法師になろうと箱根に登るが、「敵討ち」のため、母の素意に背き、勘当を蒙りながらも元服した人物である。【妙】【石】において、もはや「敵討ち」のみが目標となつた五郎には、女性にまつわる話は見られない。しかし、【山】【十】における五郎は、一人の女性に情をかけていたと描かれている。

敵討ちの場面となつた富士野の巻狩に同行することを決意した兄弟は、出発前の一晚を別々の場所ですごしている。兄十郎が大磯の虎のもとにいることは、四本共通しているが、第五郎の出発前夜の過ごし方は【妙】【石】と【山】【十】とは異なっている。

【妙】【石】では、五郎は兄と大磯の宿で別れた後、早川の伯母のもとを訪れている。そこで、土肥彌太郎速平にもてなされ、小袖、直垂等を授かるのである。(巻第六【妙】【石】)

これに対して、【山】【十】では五郎は、
「もつともしかるべし。このたび出候ハ、ながき御わかれにてもや候はんずらん。おもひ出て一へんの念仏のとぶらいもあらまほしく候。時宗もけはい坂のすそになさげをこむる子細候。

明日ハまいりあひ申さん」 (【山】)。【十】もほぼ同)と語って、兄十郎と別れるように描かれる。

兄と別れた五郎は、化粧坂の女のもとへ向かうのであるが、途中、梶原源太左衛門景季に出会う。景季に止まるように言われた五郎は、平塚の宿までひとまず逃げる(巻第五)。景季は、五郎の恋仇であり、つまらない争いを避けようとしたからである。

化粧坂の下に、遊君あり。時致、情をかけ、あさからず思ひしに、ひく手あまたの事なれば、梶原が、濱出してかへりさまに、此女のもとにうちよりて、夜と共にあそびけり。

(【十】)。【山】もほぼ同) 五郎が情をかけていた遊女のもとへ景季が通うようになり、この化粧坂の女は他への出仕をことごとく断つた。それを知らず、久しぶりに訪れた五郎は、事態を知り、歌を詠み残して彼女のもとを去る。五郎の心中は、「世に有身ならば、源太には思ひかへられじ」である(同)。五郎の歌に感動した彼女は、十六才の若さで出家してしまふ。これを知った景季は、「今は、曾我之五郎こそ敵なれ。行あはん所にて、本意お達せん。(【十】)」と考えるのである。この女の出家を知つた五郎は、

これによりて、いよく身を身とも、世を世共しらで、思ふ事のみそいそぎける。(【十】)。【山】もほぼ同) というように描かれる。

第五郎の恋は、ここに挙げたもののみである。また、この挿話は巻第五の巻末に位置し、話題の展開の仕方の特異な点が見られるので、展開を順を追ってまとめてみる。

- ・ 兄と別れる (巻狩り出発前日)
- ・ 道中、梶原源太に出会い、呼び止められる。()
- ・ 五郎、平塚の宿まで逃げる。()

・五郎のとつた行動の理由

・五郎が化粧坂の遊女に情をかけていたこと。(出発日以前)

・梶原が化粧坂の遊女に馴染んだこと。()

・遊女が他への出仕を断つたこと。()

・五郎が遊女に歌を残したこと。()

・遊女が五郎の歌に感動し、出家したこと。()

・梶原が五郎を恨んだこと。()

【十】のみ、「巢父・許由が事」「貞女が事」等の章段を加えているが、五郎と化粧坂の遊女に関わる話題は、これで完結している。物語の語られている時間が前後していることや、この挿話以前に、これに関連する記述がまったく見られないことから、この部分は

【山】【十】が成立していく過程において挿入されたものと見るべきで、この挿話は『曾我物語』の内容上、なんら影響を与えないものではない。ただ、兄十郎には大磯の虎という女性がいたのに、第五郎には虎に対応する女性はいなかったのか、ということが享受者の興味で、語り手はその興味に応え、化粧坂の女を登場させたのである。虎が廻国修行をして、十郎の菩提を弔つたように、化粧坂の女について、「生年十六歳と申に出家して、諸国を修行して、後には、大磯の虎がすみ家をたづね、道心に行して、いづれも八十余にして往生の素懐をとげにけり。(【十】)」と、前述の挿話と呼応した記述が見られることから、そのことが伺えるのである。

第五郎に関わる女性の記事は、この一件のみであるが、兄十郎に關しては、【山】【十】には【妙】【石】に登場しない女性が、二人も登場する。

兄弟がまだ伊東に住んでいた頃、十郎と同じ乳母のもとで育つた

女がいた。兄弟にとつては従姉妹にあたる女性である。

やうく、せいじんする程に、十郎かれになさけをかけ、ないく忍びてかよひけり。たがいの心ざしふかくして、家にむかへ誠のつまともさだむべかりしを、すけなりかたきをうたんと思ける間、家を家をわすれてたゞおんなのもとへぞかよひける。

【山】。【十】もほぼ同

この女性が、十郎に想いを残したまま、親の取り決めて他家へ嫁いでいった後、秘かに十郎に手紙を出す。これを知った女の夫、三浦平六兵衛は、十郎を問い詰める。(巻第四 平六ひやう衛がけんくの事)

また、兄弟の伯母舅である三浦別当は、正妻の他に、片貝という美女を召し使い、情を懸けていた。正妻はこのことを心安からず思い、十郎を呼び寄せて片貝を連れて行かせようとする。三浦の郎等達は、主人の妾を無断で連れ出すと勘違いして十郎を追いかけ、切り殺そうとする。(巻第四 三浦のかたかいが事)

これらの事件は、「敵討ち」を最優先する十郎の冷静な対応によって、事無きを得るのであるが、こうしたエピソードは、十郎の「冷静さ」を物語ると同時に、兄弟に好意を寄せた女性達の存在を物語るものでもあるのである。

苦心の末、積年の「敵討ち」という本意を遂げ、富士の裾野で討ち死にした兄弟は、後の幸若舞曲での描かれ方からも類推されるように、英雄として語られる。その兄弟が英雄であったことを補強するように、語り手は、女性達が兄弟に好意を寄せるように語るのにはあるまいか。『曾我物語』が、女語りの代表的な作品であったことから、これらの女性達は、語り手によって物語の中に登場さ

せられた享受者の代表者と考えられる。

六 おわりに

第二から四節で述べたように、【妙】【石】と【山】【十】の間で、大磯の虎をめぐる十郎祐成の描かれ方が異なっている。【妙】【石】における十郎は、「敵討ち」をカモフラージュするためといえ「心に與う」女性を探し求め、その末にめぐり会った虎という女性を心から愛し、「敵討ち」という兄弟の目標と、「虎との恋愛」の間で苦悩し、その中からやはり「敵討ち」を選び取ってゆく。虎との生活を選択したとしても、やはりあふれ者と遊女である。十郎討ち死にの後、頼朝からの尋問に応じる五郎の言葉の中に以下のような記述がある。

争死^ニ其義^ニ可^レ候。其故何思食。祖父伊藤入道、自^レ君蒙^ニ御勘當^ニ、既被^レ誅進候。敵祐経亦成^ニ御氣色吉大名^ニ被^ニ召仕^ニ候、方々以意根深候。

(【妙】。【石】もほぼ同)

頼朝に対する遺恨の有無を問われた五郎は、祖父の代からの政權に対する恨み、敵祐経の栄華に対する恨みを述べる。これは五郎一人の意見ではない。頼朝の政權からあふれてしまった者は、「敵討ち」を選択し、消えてゆくしかない。敵をはじめとし世の中に対する憤懣と、虎との恋愛の間で十郎は迷うのである。それを支え励ましていったのが、弟の五郎である。【妙】【石】の二本には、そうした多くの葛藤の中から取捨選択をしていく生の姿という、現実世界に極めて近接したおもしろさが見られる。

これに対して【山】【十】における十郎は、「敵討ち」に対してなんら譲るところがなく、その目標を達成すべく享受者の前に登場

し、数々の困難をくじけることなく克服して行く。十郎と虎の悲恋をいうよりも、虎の悲しみの色の方が濃くならざるを得なかったのも、この十郎の登場人物としての性格ゆえである。

弟の五郎もその描かれ方に大きな相違が見られる。このことに関して、また別の場で述べたいと思うが、「敵討ち」を最優先し、男女の道にも迷うことのない兄であるため、【妙】【石】で描かれるような、兄を支え励ます弟の存在の価値が薄くなるためである。

第五節で述べた【山】【十】に登場する兄弟を巡る女性達も、すべからず兄弟に課せられた困難の数々である。「世にある者ならば」「敵討ち」という目標がなかったら、という兄弟の悔しさや悲しさを蓄積させていく要因なのである。「敵討ち」という最優先の目標を掲げ、数々の悔しい思いに耐え、それを「敵討ち」によって昇華させようとする兄弟は、しばしば現実から離れる。そこには、【妙】【石】のおもしろさとは質を異にした、いわば痛快なおもしろさが見られると言っていいたろう。

【注】

(1) 拙稿 『曾我物語』の一万箱王兄弟

—— 幼年期の二人の描かれ方の諸本間の相違 ——
筑波大学平家部会論集 第四集 平成六年七月

(2) 荒木良雄氏

『曾我物語三遷の論』 『古典研究』昭和一六年一〇月号、
『大山寺本曾我物語』(昭和三六年九月 白帝社) 解説

(3) 『曾我物語』諸本は、以下の文献により引用する。

妙本寺本 (伊藤祐淳氏蔵真名本曾我物語 勉誠社)

大石寺本 (国史叢書所収大石寺本曾我物語 国史研究会)

太山寺本 (濱口博章解題太山寺本曾我物語 汲古書院)

十行古活字本 (日本古典文学大系 岩波書店)

なお、妙本寺本の読み下しにあたっては、以下を参照した。

貴重古典籍叢刊3所収『妙本寺曾我物語』角川源義氏編

(昭和四四年三月 角川書店)

東洋文庫『真名本曾我物語1・2』青木晃氏・池田敬子氏

・北川忠彦氏・笹川祥生氏・信太周氏・高橋喜一氏編 福

田晃氏解説(昭和六二・六三年、平凡社)

(4) 村上学氏『曾我物語の基礎的研究』序章 第三章 真字本

と仮名本の関係(昭和五九年二月、風間書房)

(5) 福田晃氏「巫祝唱道の文芸——曾我物語をめぐる——」

(『国文学 解釈と鑑賞』三九卷一号、昭和四九年一月

後に、『中世語り物文芸——その系譜と展開——』昭和五六

年、三弥井書店、に再録)

(6) 福田晃氏は、「幸若舞曲は、荒ぶる英雄の悪鬼討討のさまを

述べ、その結果としての天下泰平が、そのままの世に実現

することを目途として演じられるものである。」と、幸若舞

曲を定義づけておられる。

「幸若舞曲の性格(下)——軍記物語とのかかわりから——」

第二章 幸若舞曲と軍記物語

(吾郷寅之進氏編『幸若舞曲研究』第二卷、昭和五六年二

月、三弥井書店、所収、後に、『中世語り物文芸』(前

掲)に再録)

(筑波大学大学院 文芸・言語研究科 学生)